

フランジ型タンクで貯留しているSr処理水の処理状況について

2018年7月6日



東京電力ホールディングス株式会社

フランジ型タンクで貯留しているSr処理水の状況

- Sr処理水を貯留しているフランジ型タンクの使用状況は以下の通り。
 - 運用中¹ 57基
 - 停止済² 62基

[参考]第56回検討会時点(2017年10月26日集計データ)

 - 運用中 : 73基
 - 停止済 : 46基
- フランジ型タンク内Sr処理水の放射性物質量の低減状況は以下の通り。
 - 2018/6/14時点: **約2.8E+13 [Bq]** ...第56回検討会時点より約60%減
 [参考]第56回検討会時点: 約7.0E+13 [Bq]
- **放射性物質量が高かったG6南, G6北, G4は多核種除去設備による浄化処理が完了。**現在はEエリアの浄化処理を実施中(2018/10頃完了予定)。
 - 浄化処理待ちのC東西エリアについては予防保全として上部側板フランジ部に対して止水処置を施工中。

表 フランジ型タンク内のSr処理水の状況

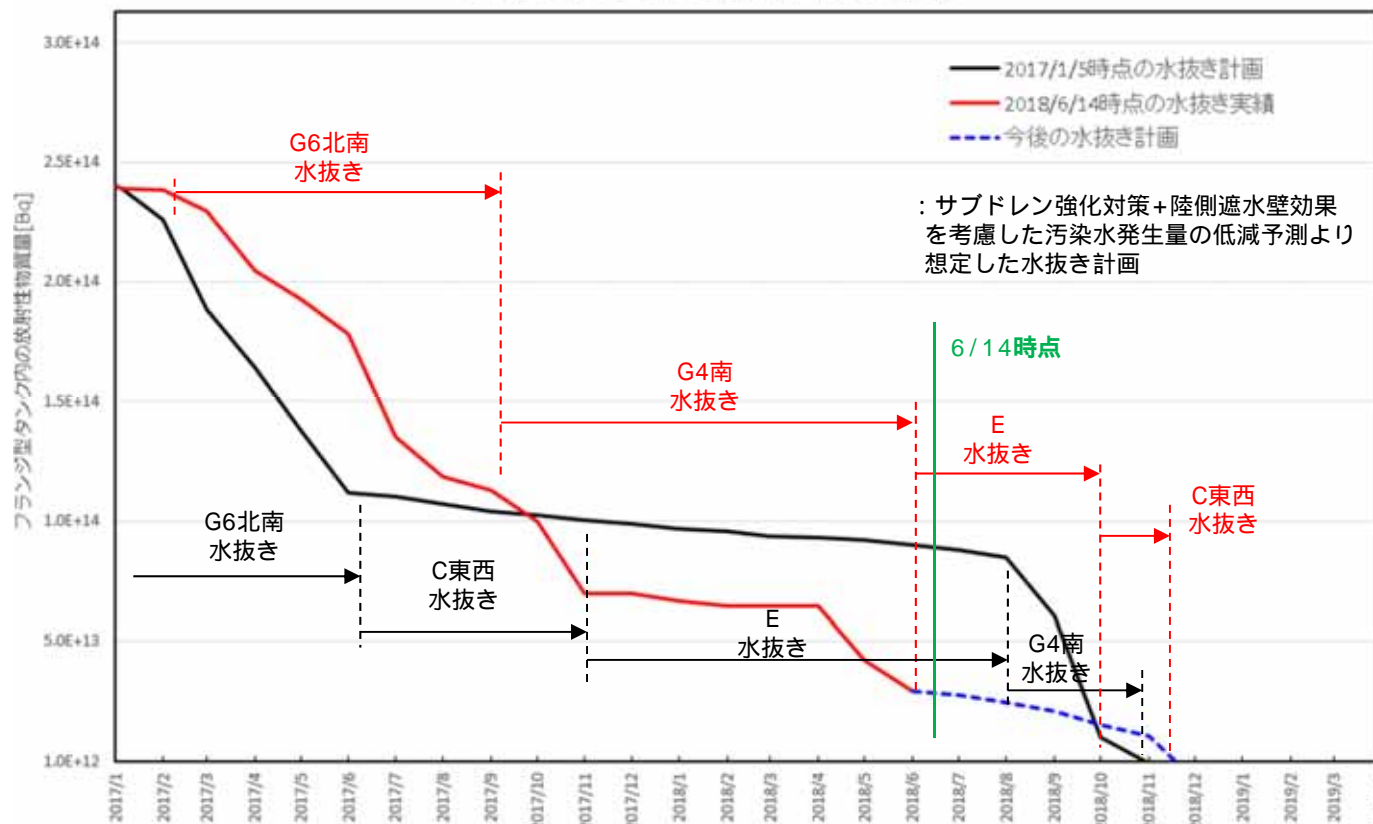
貯留水の種類 ³	設置エリア	基数	2017/10/26時点保有水量[m ³]	2018/6/14時点保有水量[m ³]	2017/10/26時点放射性物質量 ⁴ [Bq]	2018/6/14時点放射性物質量 ⁴ [Bq]	2018/6/14時点水抜き開始予定時期 ⁵
Sr処理水	H5北	8	約0	約0	—	—	解体準備中
	G6南	18	約0	約0	—	—	解体準備中
	G6北	20	約0	約0	—	—	解体準備中
	G4南	16	約6,700	約0	4.1E+13	—	解体準備中
	E(ABCDE群)	44	約43,400	約42,300	1.8E+13	1.8E+13	現在処理中 (2018/10頃完了予定)
	C東	5	約4,000	約4,000	2.4E+12	2.4E+12	2018/10頃
	C西	8	約8,100	約8,100	8.9E+12	8.9E+12	2018/11頃

1 運用中: 残水処理中を含む運用中のタンク
 2 停止済: 解体済, 解体準備中のタンク
 3 各貯留水の線量オーダー(Sr90)は, RO濃縮塩水(10⁷~10⁸Bq/L), Sr処理水(10⁴~10⁶Bq/L), RO処理水(ND~10¹Bq/L), ALPS処理済水(ND~10⁰Bq/L)
 4 代表核種(Cs134, Cs137, Sr90)の放射能濃度及びタンク保有水量より算出
 5 サブドレン強化対策+陸側遮水壁効果を考慮した汚染水発生量の低減予測より推定した時期

放射性物質量の低減状況

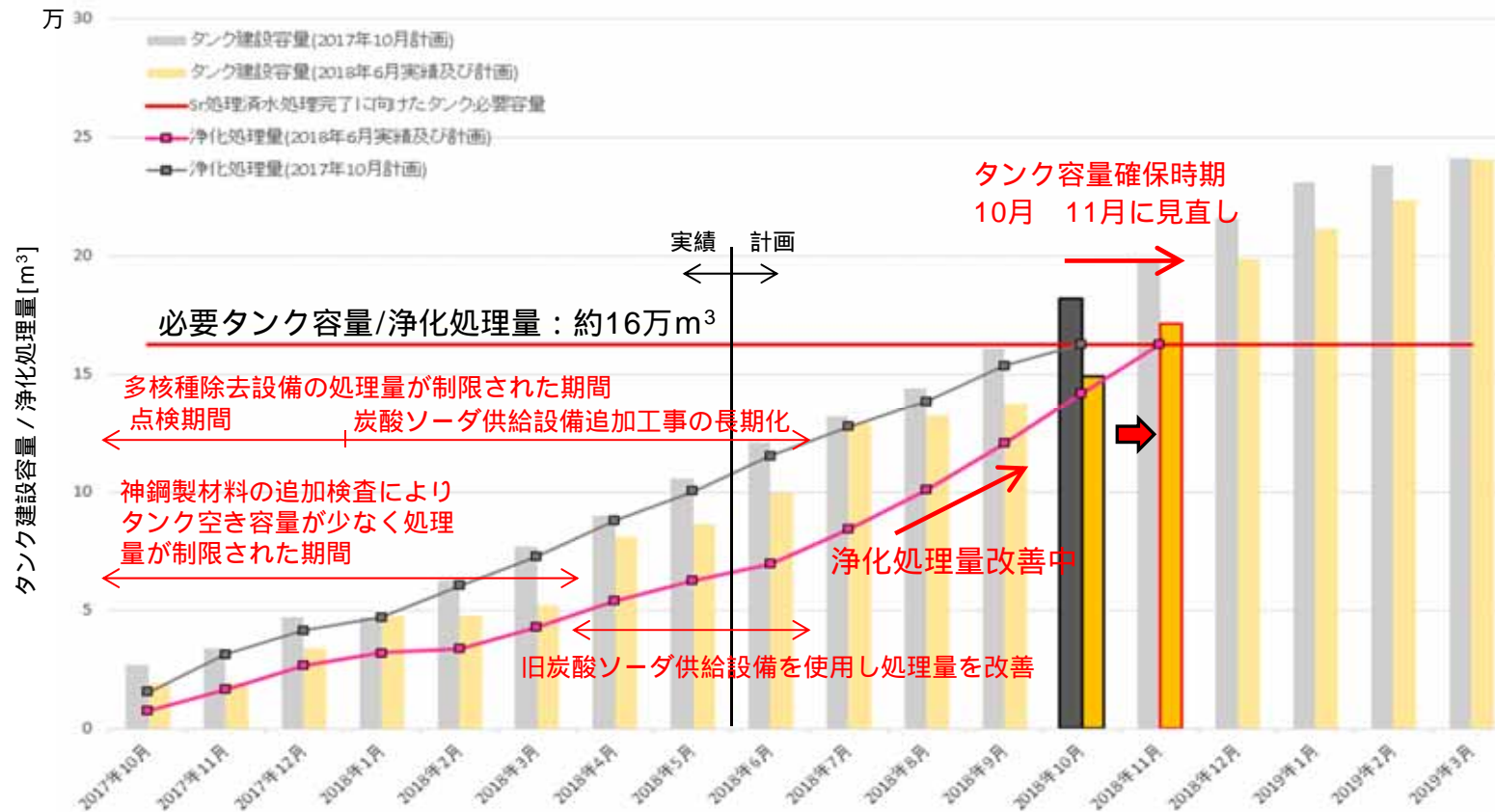
- フランジ型タンク内の放射性物質量の低減状況は下図の通り。
 - グラフ黒線：2017/1/5時点の水抜き計画 ...第50回特定原子力施設監視・評価検討会提示
 - グラフ赤線：2018/5/31時点の水抜き実績
 - グラフ青線：今後の水抜き計画
- フランジ型タンク内のSr処理水は，放射性物質量の早期低減を重視した水抜き計画の見直しを実施したことにより，放射性物質量は当初計画に比べて早期低減を実現できている。残りEエリア及びC東西エリアの2エリアについても，**2018年11月頃に浄化処理を完了する見込み**。

フランジ型タンク内の放射性物質量の推移



Sr処理水の浄化処理完了時期の見直し（2017年10月時点の計画と現計画の差異）

- フランジ型タンク内のSr処理水の浄化処理完了までに必要タンク容量/浄化処理量は約16万m³と推定。
- Sr処理水の浄化処理完了時期は，第56回検討会時点では2018年10月頃完了見通しであったが，現時点までの実績を反映したところ，**2018年11月頃となる見直し**。
- 溶接型タンクの建設計画については，許認可手続きの実績と現場の詳細工程を踏まえ，必要タンク容量が確保できる時期を設定。
- 浄化処理計画については，炭酸ソーダ供給設備を追加する多核種除去設備の検査完了に伴い，2018年7月以降の運転計画を見直し。



注) 本シミュレーションでは，サブドレン強化対策+陸側遮水壁効果を考慮した汚生水発生量の低減予測を利用

【参考】C東西エリアのフランジ型タンクに対する予防保全策

- C東西エリアのフランジ型タンクの漏えいリスク低減策として、側板フランジ部 に対して止水処置を施工中（2018年8月頃完了予定）（図1，2参照）。

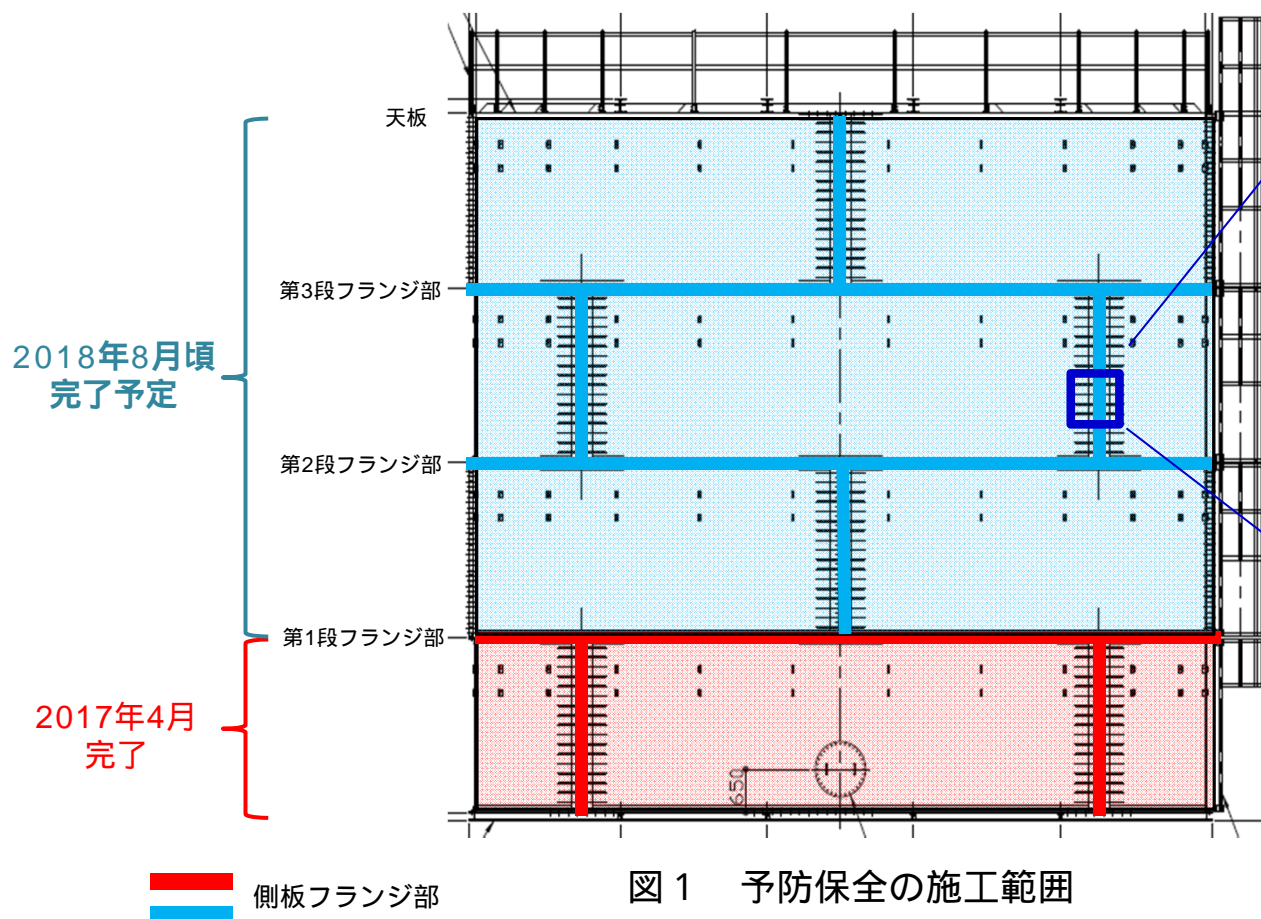


図1 予防保全の施工範囲

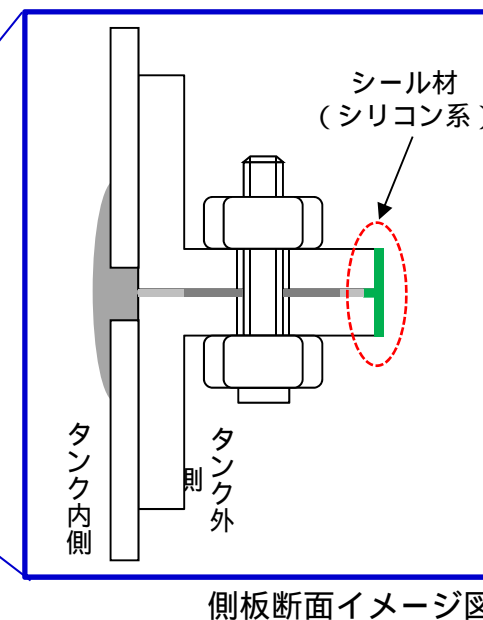


図2 シール材施工方法（例）

1 / 2号機山側サブドレンのトリチウム濃度上昇 に対する対応状況

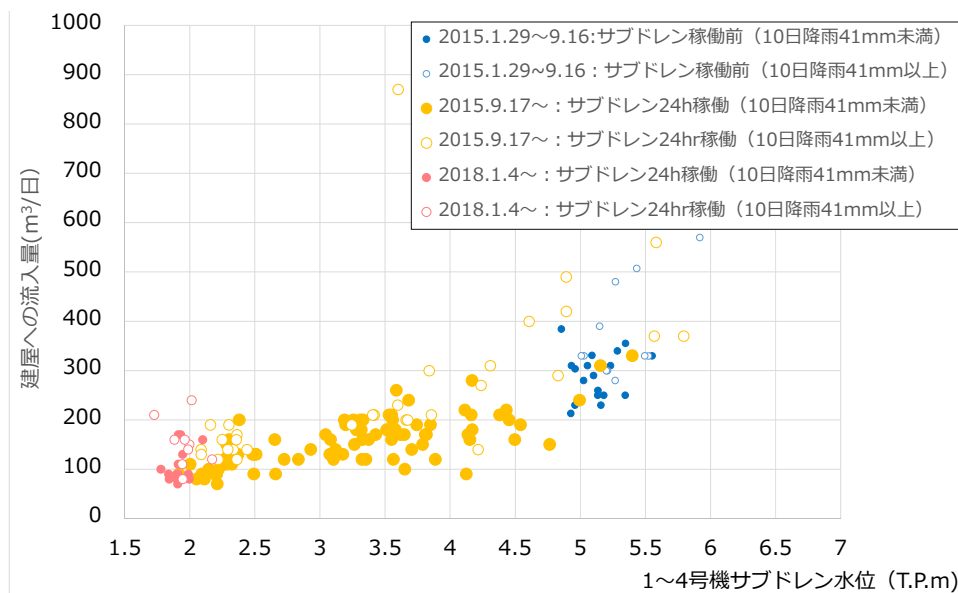
2018年7月6日

TEPCO

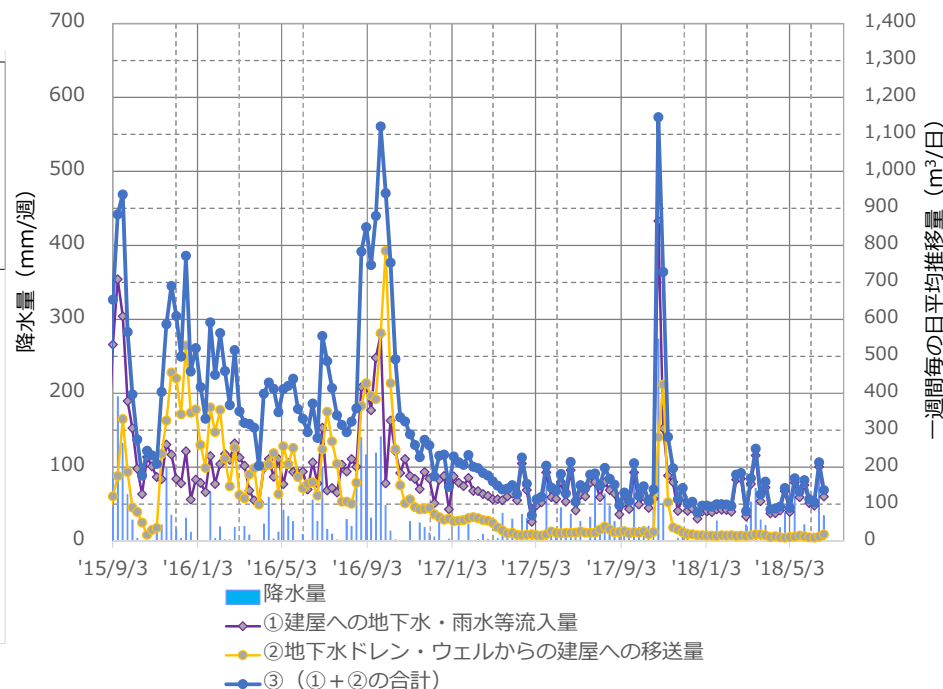
東京電力ホールディングス株式会社

1. 建屋への地下水ドレン移送量・地下水流入量等の推移

- サブドレンは信頼性向上対策を進めてきた結果、より安定的に稼働が来ている。
- サブドレンの稼働水位を低下させることで建屋への地下水・雨水流入量は減少してきている。
- 至近の地下水・雨水流入量は、降雨時を除けば100m³/日程度まで減少してきている。
- この先も引き続き建屋水位低下に合わせてサブドレン水位も低下させていく。



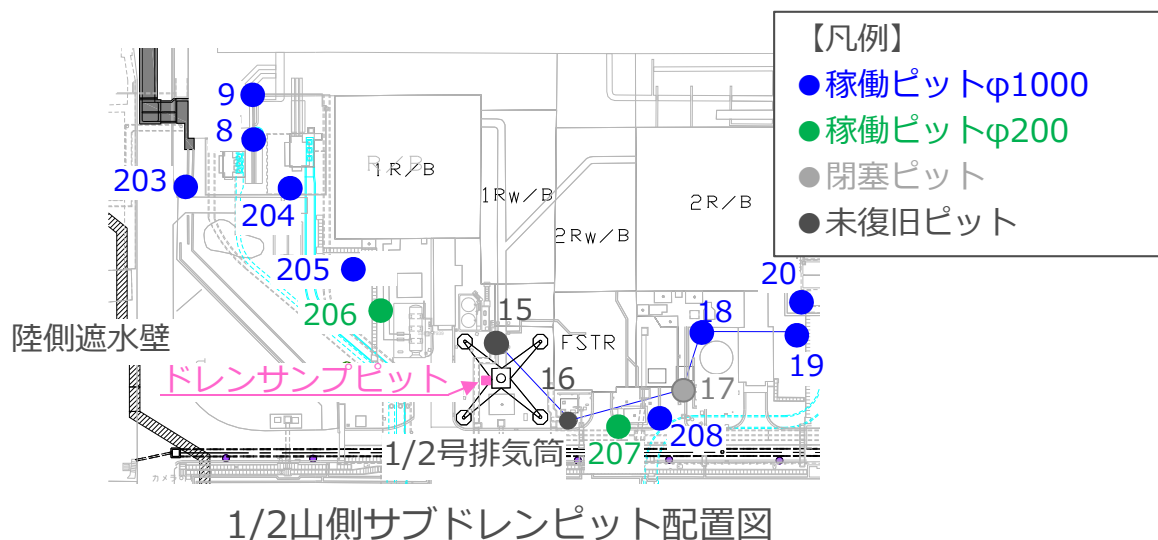
【サブドレン水位及び建屋への流入量相関図】
(2015.1.29以降)



【建屋への地下水ドレン移送量・地下水流入量等の推移】

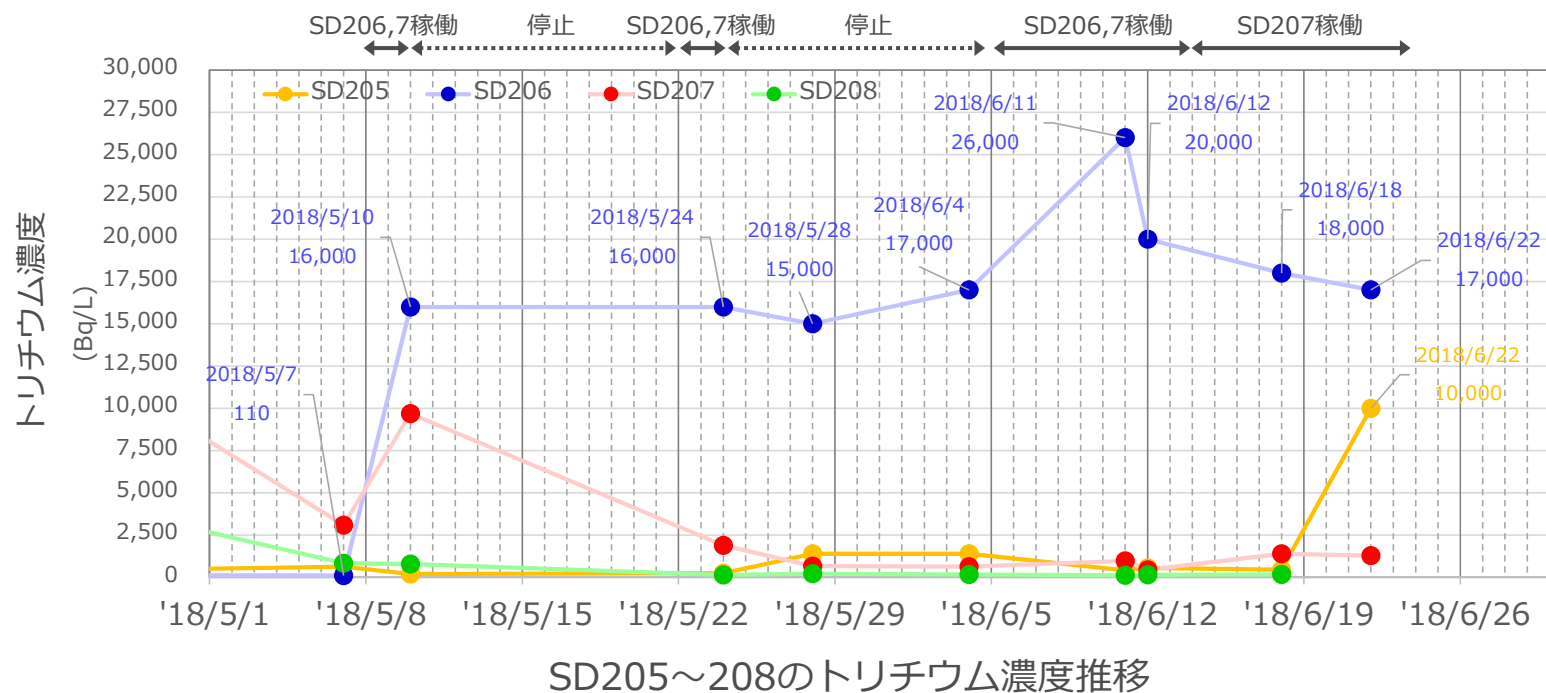
2. 1 / 2号機山側サブドレンのトリチウム濃度の状況

- サブドレンの設定水位を下げて運用してきたところ、山側のサブドレンの一部(SD205~208)について、告示濃度の範囲内でトリチウム濃度の一時的な上昇が確認された。
(トリチウム濃度は最大39,000Bq/L 告示濃度は60,000Bq/L)
- この一時的な濃度上昇は、2011年3月~2016年9月までの間に1/2号機排気筒を介して地盤へ浸透した雨水が、サブドレンの増強や設定水位低下により移流・拡散したものと想定している。
なお排気筒を介した地盤へ浸透防止対策として2016年9月から1/2号機排気筒ドレンサンプルピットから建屋へ水移送を実施中。
- SD205~208の濃度上昇抑制ならびに稼働率向上による建屋流入量の抑制を目的に、2018年5月から試験的にサブドレンのL値を濃度上昇前の設定値に戻して運用を実施している。
- 他のサブドレンの稼働にも影響し、建屋流入量が増加するリスクを回避するために更なる対策について検討を進めている。



3. 1 / 2号機山側サブドレンピットの試験運用の結果

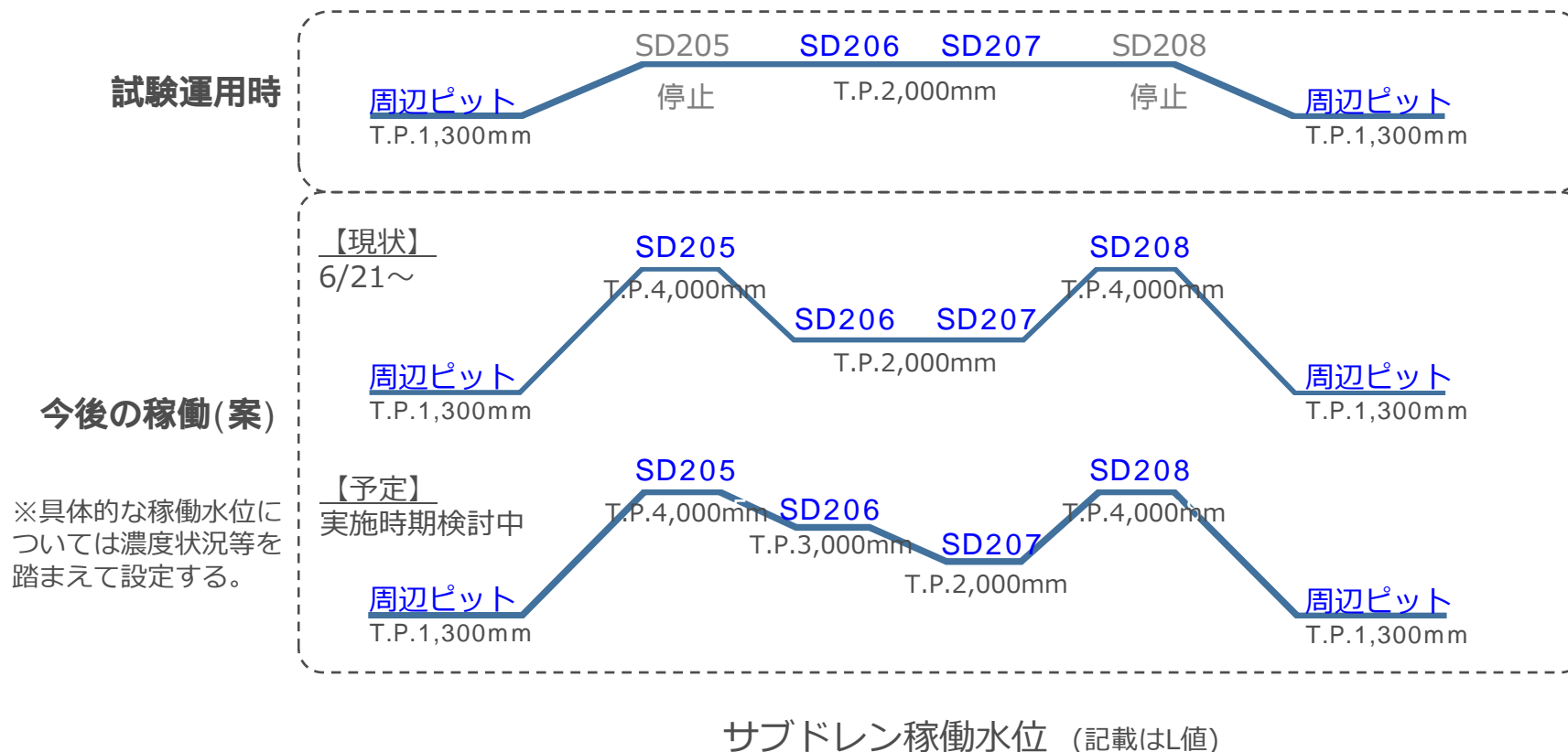
- 2018年5月8日にSD206,207のL値を変更(T.P.1,450mm 2,000mm)し, 試験運用を実施してきた。(SD205,208は停止。)
- 試験運用によるトリチウム濃度の推移は以下のとおり。いずれも、告示濃度(60,000Bq/L)未満の範囲での変動となっている。
 - SD206は、一時的に26,000Bq/L程度まで上昇した後、2018年6月22日時点で17,000Bq/L程度となっている。
 - SD207は、一時的に10,000Bq/L程度まで上昇した後、1,500Bq/L程度まで低下している。
 - SD205,208は、試験運用開始後、低い濃度が継続していたが、SD205については、2018年6月22日に10,000Bq/L程度まで上昇。これは停止時のSD206の水位よりもSD205の水位が、低い状況だったためと想定される。



4. 1 / 2号機山側サブドレントリチウム濃度上昇への今後の対応 (1/2) **TEPCO**

＜試験運用をふまえたSD205～208の今後の稼働方針＞

- SD207はトリチウム濃度が低下したため試験運用時の稼働水位を継続する。
- SD205, 208については現在停止中であるが、台風時等に地下水水位が上昇することで建屋流入量が増える可能性があるため、大雨時には汲み上げ可能な稼働水位とする。
- SD206はトリチウム濃度が高止まり傾向にあるため、稼働水位を上げて濃度変化を確認する。

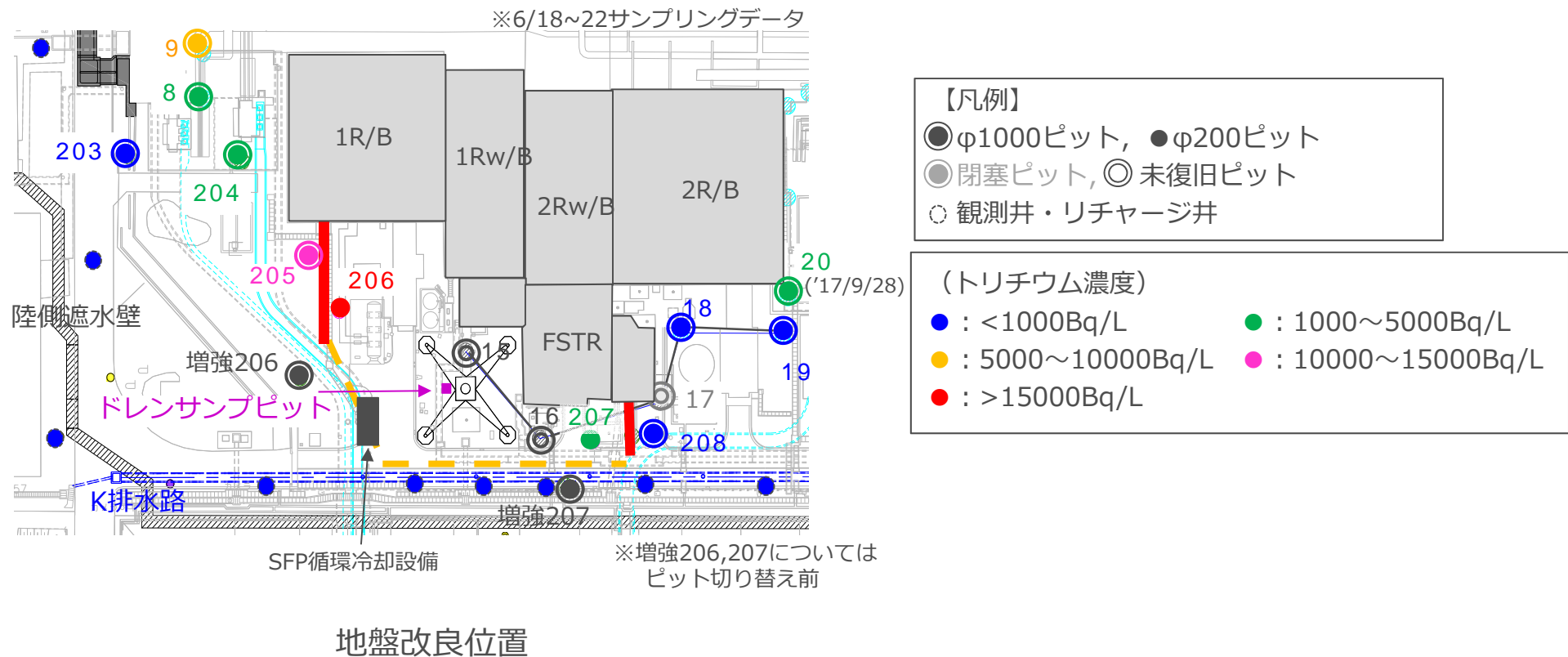


5. 1 / 2号機山側サブドレントリチウム濃度上昇への今後の対応 (2/2) **TEPCO**

- 周辺ピットのトリチウム濃度上昇抑制対策として、1 / 2号機山側サブドレン周辺の地盤改良を行う。

<対策概要>

- ✓ 南北への高濃度トリチウムの移流・拡散防止対策を実施する。(地盤改良範囲：—)
- ✓ 西側については上記対策の効果を評価し範囲を検討する。(地盤改良範囲：- - -)
- ※排気筒撤去工事と干渉する一部エリアについては、排気筒撤去工事後に実施する。



【参考】これまでの経緯（1）

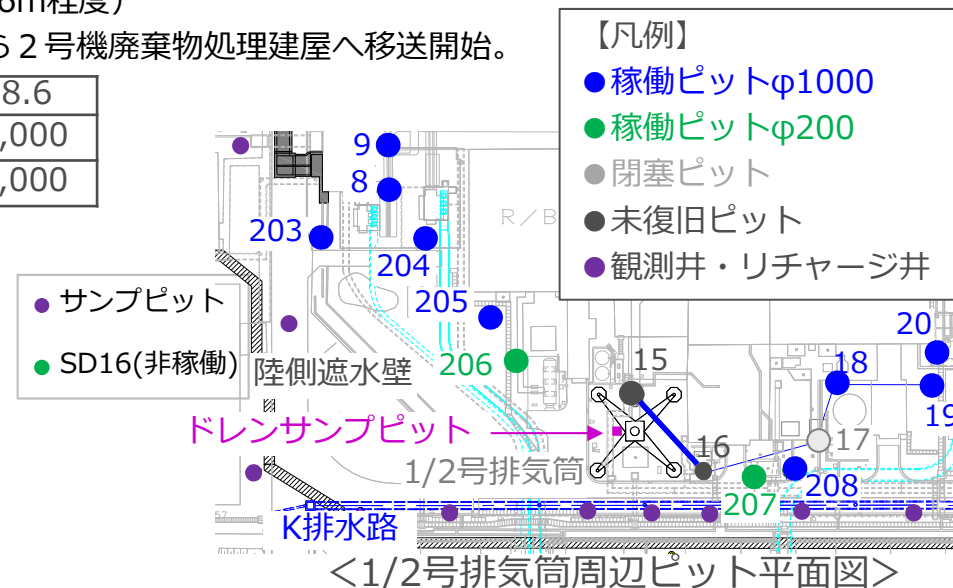
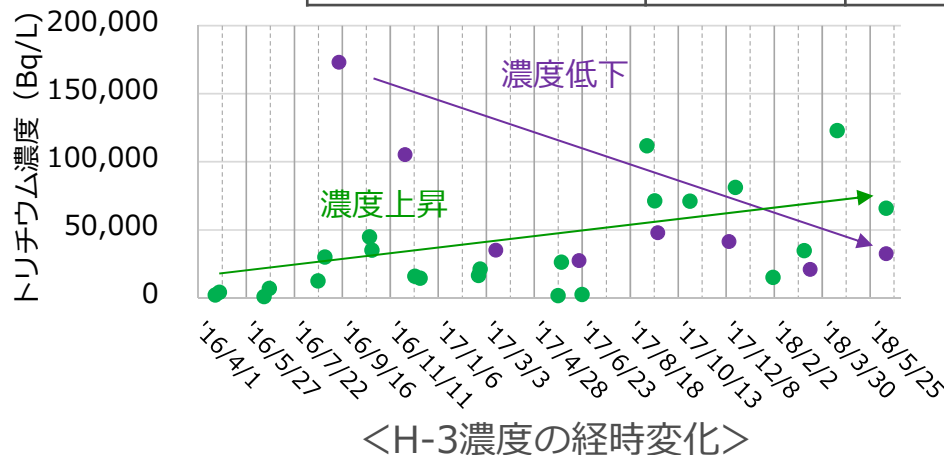
➤ 1 / 2号排気筒および周辺SDに関するこれまでの経緯を以下に示す。

- 2011.8 1/2号排気筒の筒身下部に接続する配管にて高線量箇所を確認。（2013.12, 2015.9にも同様な線量を確認）
- 2014.10 SD試運転時に
SD18,19において高いH-3を検出。

	SD16	SD18	SD19
H-3[Bq/L]	84,000	6,800	8,000
採水日	2014.10.29	2014.10.22	2014.10.22

- 2014.12 SD15～19は横引き管で連結しており、ガレキ混入等で復旧が困難であったNo.15～17が汚染している、その水を引き込んだと推定されたため、SD17を閉塞してSD15～17とSD18,19を分離した。
- 2015.9 SD稼働開始（山側SD平均水位T.P.+6m程度）
- 2016.9～1/2号排気筒のドレンサンプピットから2号機廃棄物処理建屋へ移送開始。

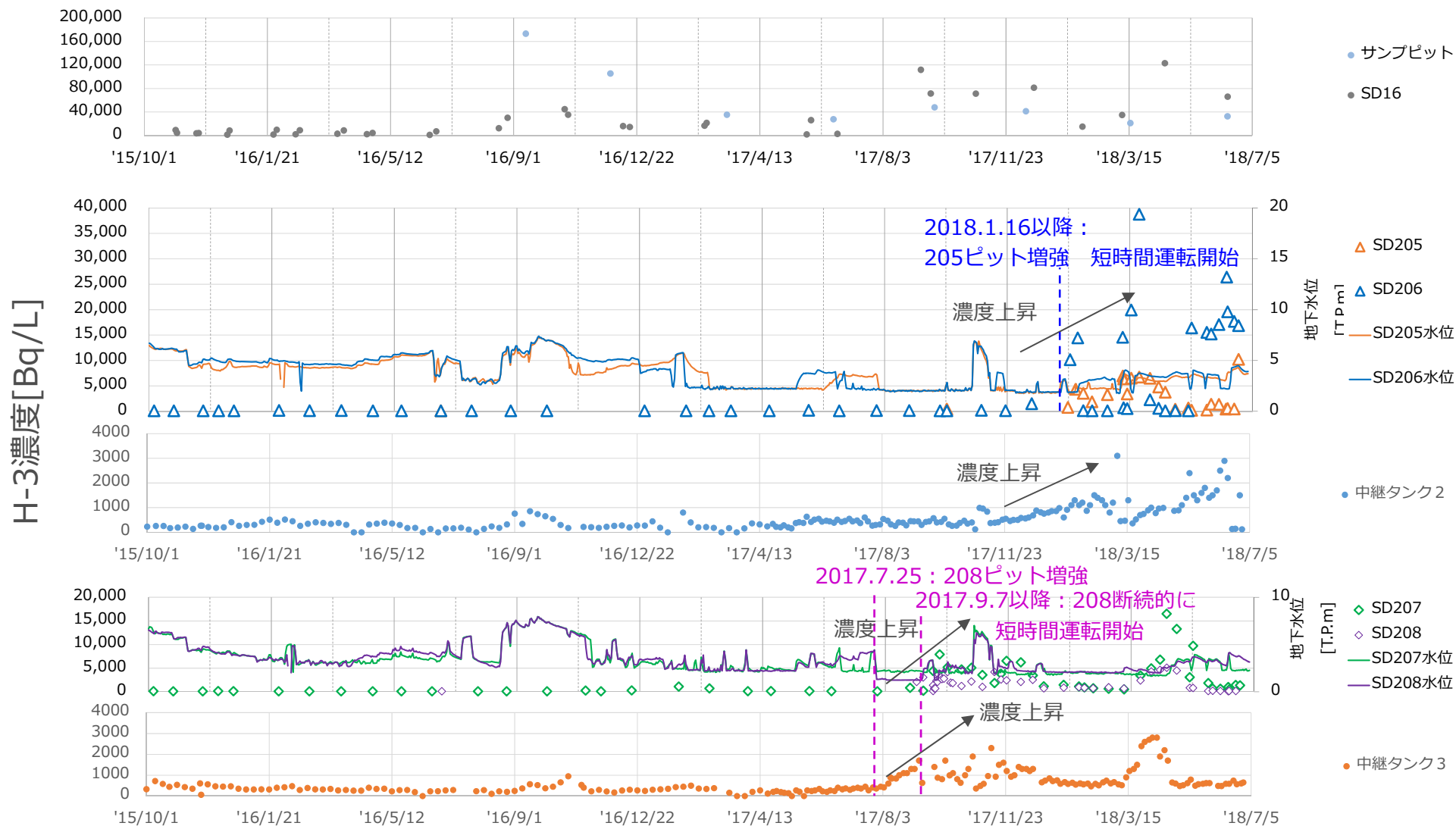
トリチウム濃度[Bq/L]	2016.9	2018.6
ドレンサンプピット	約170,000	約33,000
SD16	約2,000	約66,000



➤ ドレンサンプピットのトリチウム濃度が低下していることから、震災後から2016年9月までに1/2号排気筒を介して地盤に流出した雨水が移流・拡散しているものと推定している。

【参考】これまでの経緯 (2)

➤ 2015年10月以降の中継タンク1, 2および1 / 2号排気筒周辺ピットのトリチウム濃度推移を以下に示す。

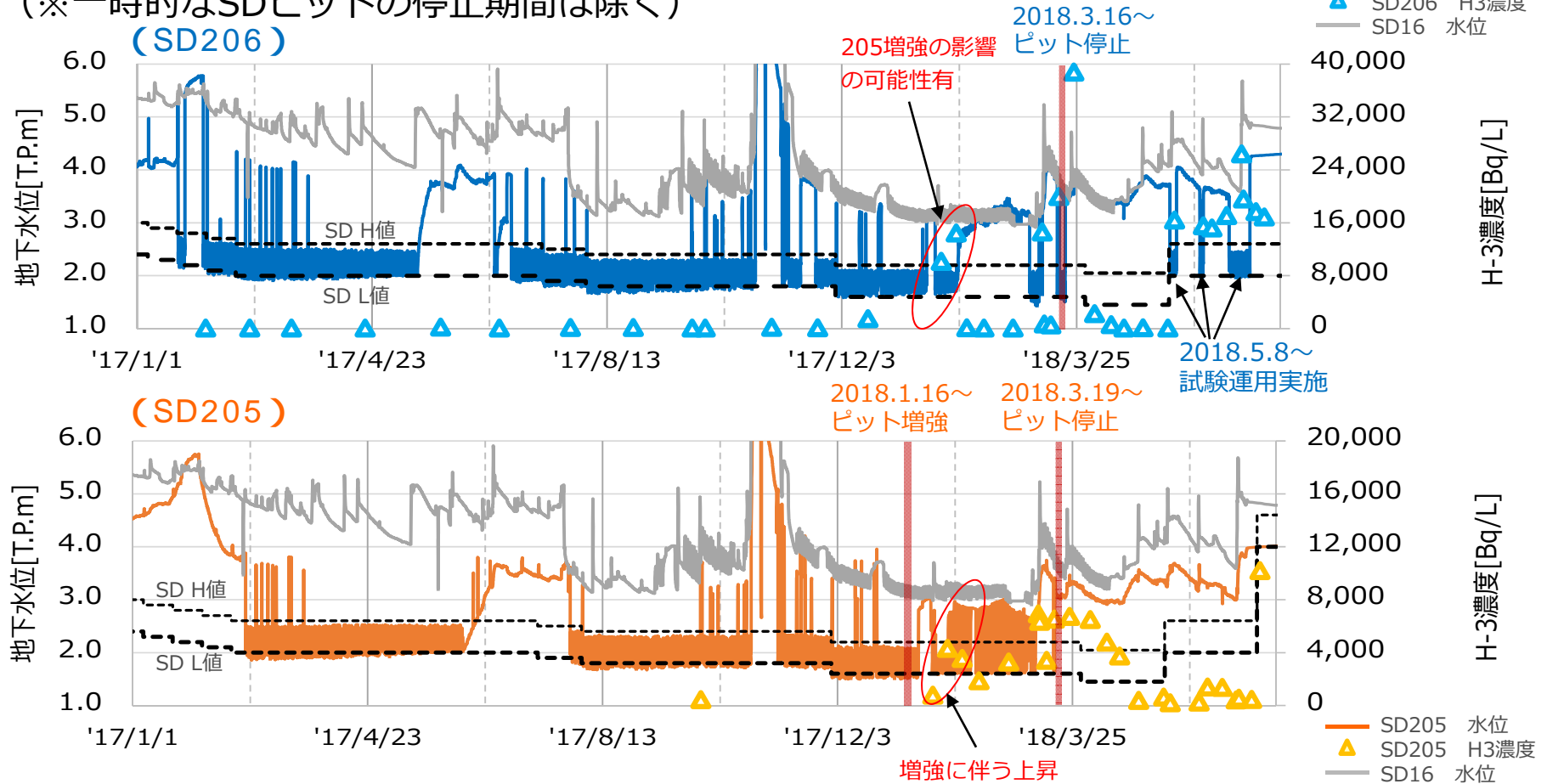


➤ SD205,206,207,208のH-3濃度上昇に伴い, 中継タンク2および中継タンク3のトリチウム濃度も上昇している。(系統内で収支しているわけではないと推定される。)

【参考】SD205,206のトリチウム濃度の推移

➤ 2017年1月以降のSD205, 206のトリチウム濃度の推移を以下に示す。

(※一時的なSDピットの停止期間は除く)



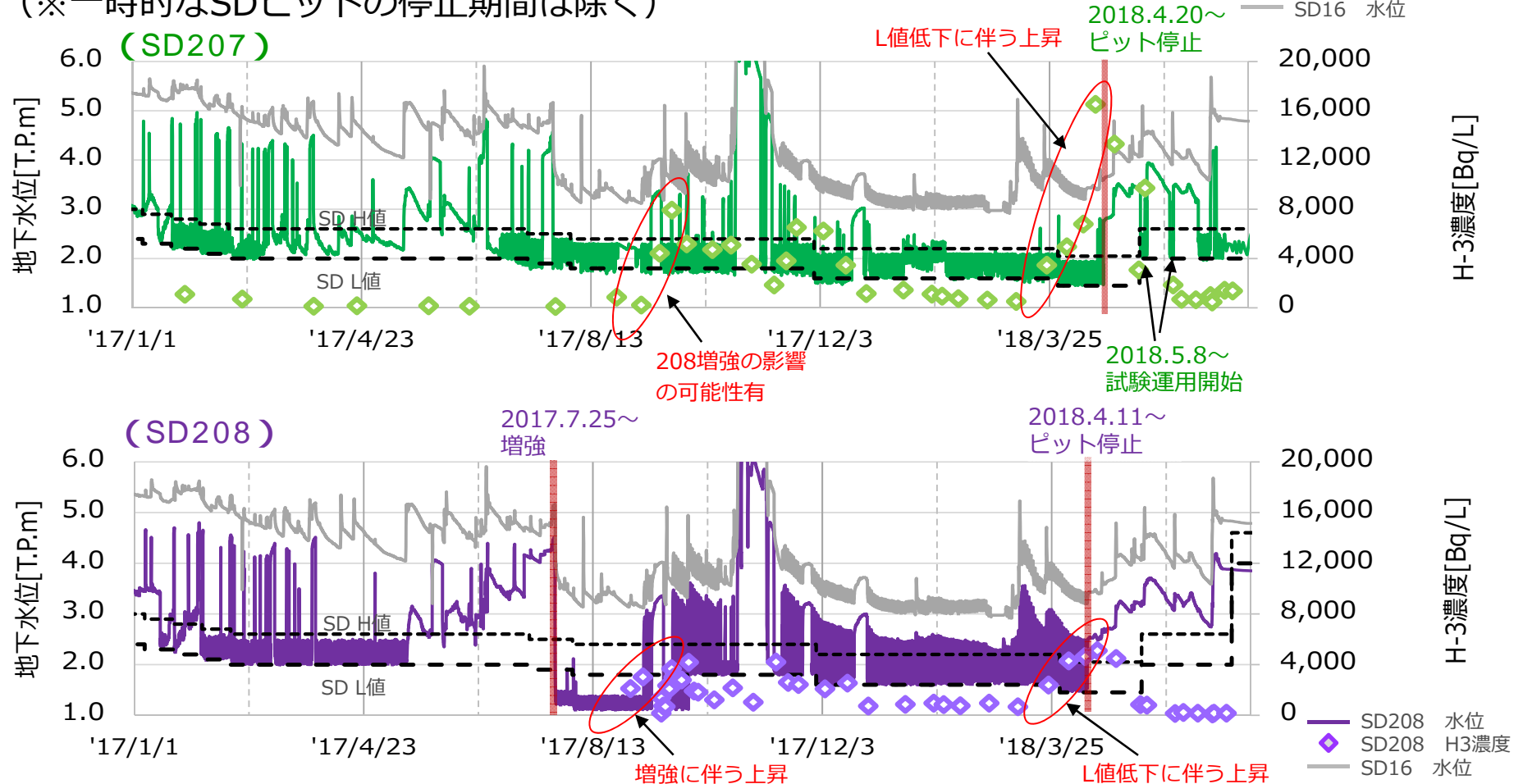
➤ 2018年1月末からピット増強の影響でSD205のトリチウム濃度が上昇した。同時期にSD206の濃度も上昇していることから、増強によるSD205の引き込みによりトリチウムの移流・拡散が促進されたと考えている。

➤ 現在SD205は停止, SD206は稼働している状況。

【参考】SD207,208のトリチウム濃度の推移

➤ 2017年1月以降のSD207, 208のトリチウム濃度の推移を以下に示す。

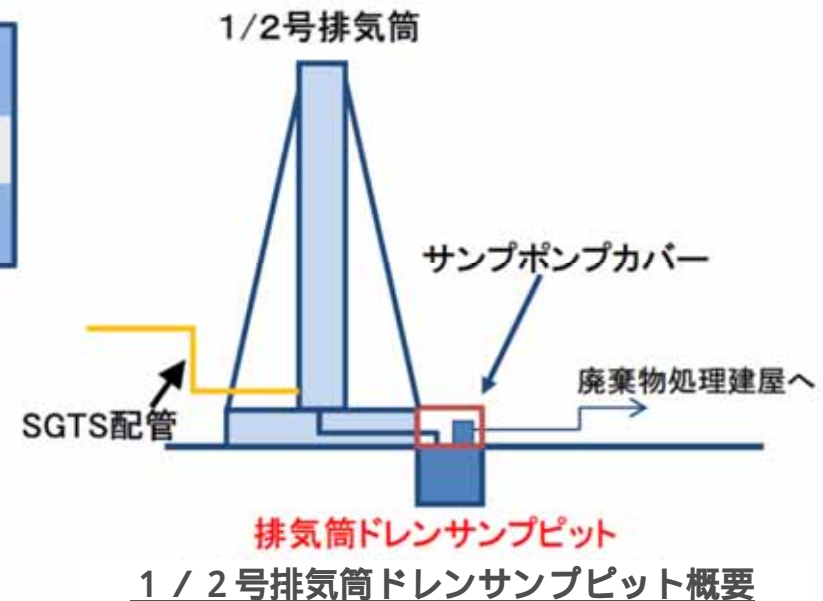
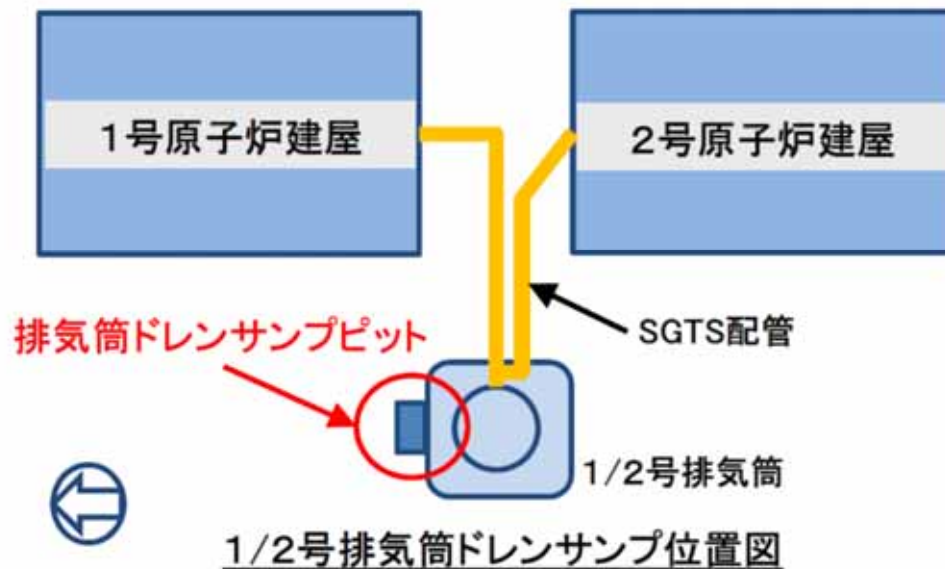
(※一時的なSDピットの停止期間は除く)



- 2017年7月末からピット増強の影響でSD208のトリチウム濃度が上昇した。その後、SD207の濃度も上昇していることから、増強によるSD208の引き込みによりトリチウムの移流・拡散が促進されたと考えている。
- 現在SD208は停止、SD207は試験運用後トリチウム濃度は低下している。

【参考】 1 / 2号排気筒ドレンサンプルピット

- 1 / 2号排気筒の筒身に接続する排気筒ドレン配管およびSGTS配管において高線量箇所（～10Sv/h）が確認された。
- 排気筒内の雨水が、事故時のベント操作に起因する筒身内線源と共に排気筒ドレンサンプルピットに流入し、ピットより溢れ周辺地盤に流出して汚染を拡大する可能性が考えられた。
- 以上より1 / 2号排気筒ドレンサンプルピットに流入する雨水についてピットから溢れない対策を実施している。



建屋滞留水処理の進捗状況について

2018年 7月 6日



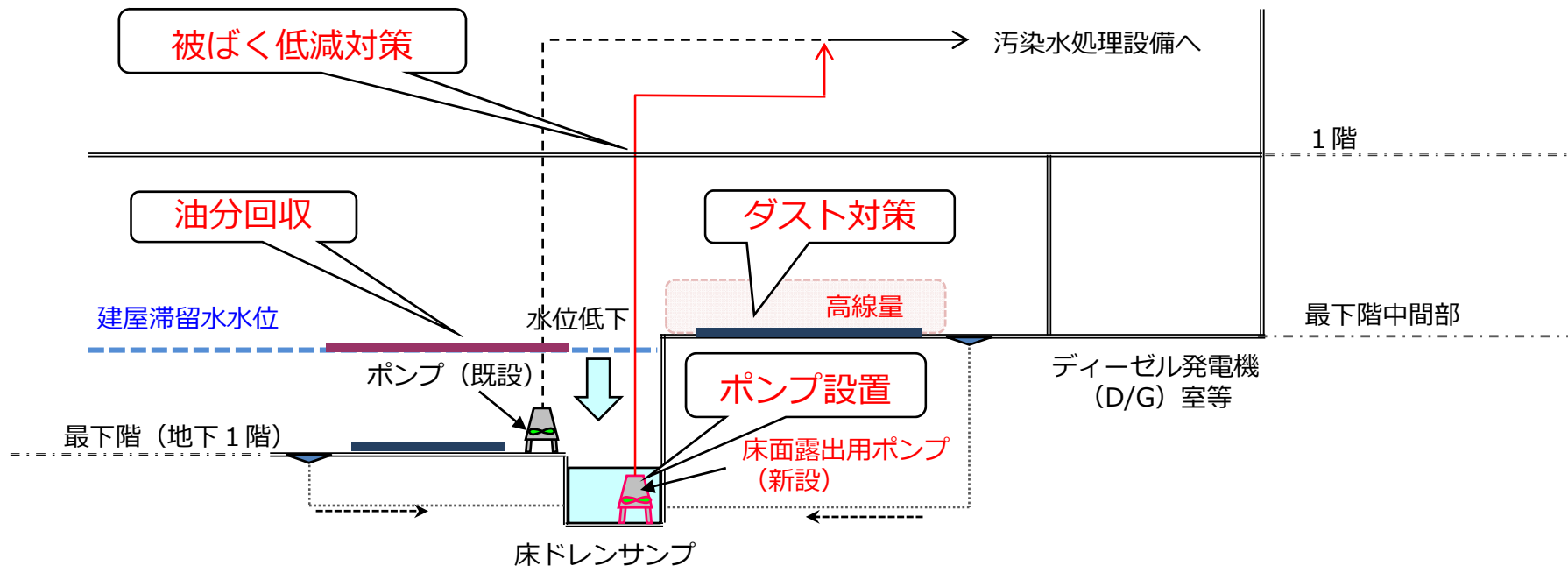
東京電力ホールディングス株式会社

- 循環注水を行っている1~3号機原子炉建屋以外の建屋の最下階床面を2020年までに露出させる計画。
- 2~4号機タービン建屋（T/B）最下階中間部を2017年12月に露出させ、残水が確認されたエリアの排水完了。
- 高い空間線量が確認された最下階中間部の一部について、調査を実施。配管等に高い線源があることを確認。作業被ばく抑制のため、作業に支障のない1階エリアから遠隔での床面露出用ポンプ設置等を進める。

1. 建屋滞留水処理の進捗状況

1.1 建屋滞留水処理に係わる作業

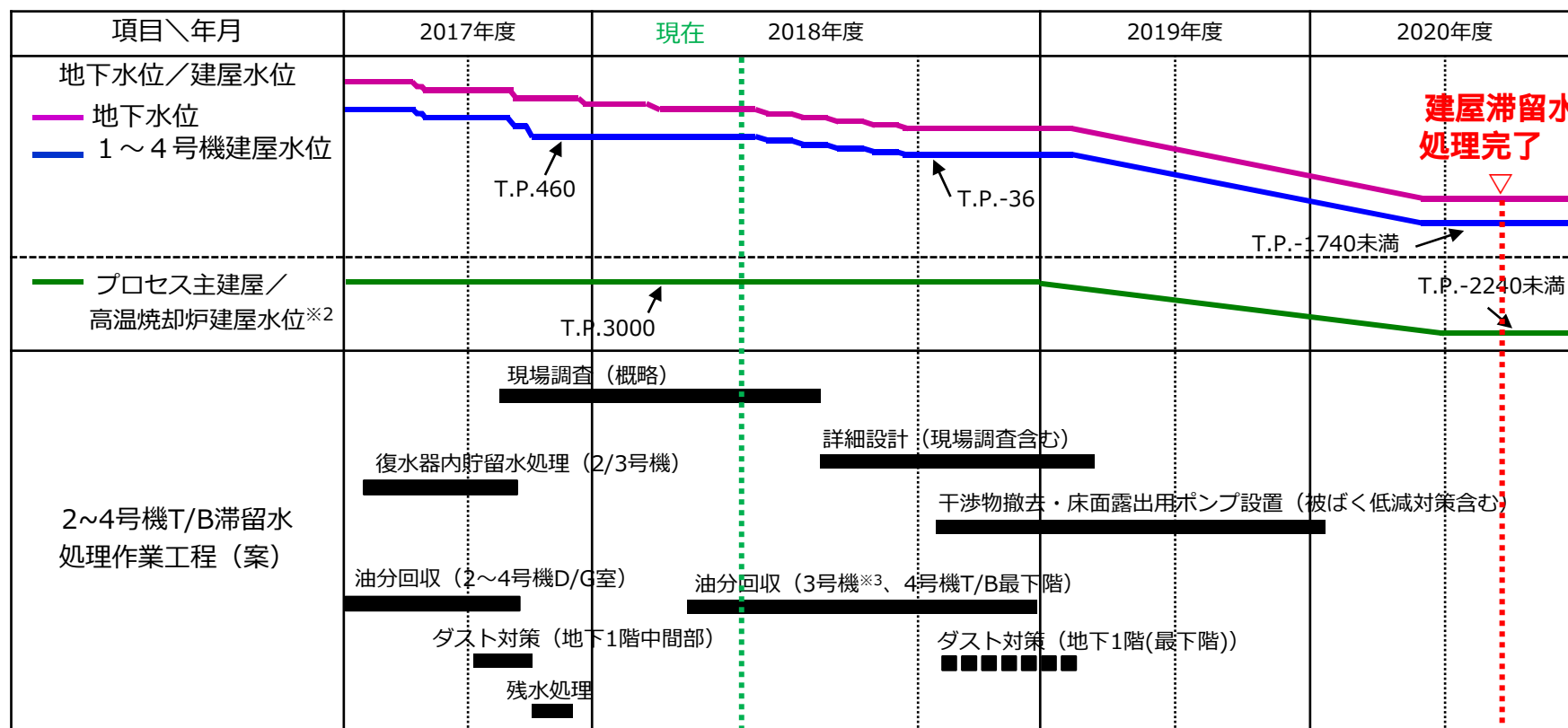
- 建屋滞留水処理を進めるにあたり、建屋滞留水水位を低下させ、床面を露出させるために、以下の作業を順次進めているところ。
- 油分が確認されているエリアの床面露出前までに、汚染水処理設備の性能低下を防止するため、滞留水表面上の**油分回収**
- 床面露出にあわせて、床面スラッジ等による**ダスト対策**
- ポンプ設置作業等を行う作業員の**被ばく低減対策**（遠隔でのポンプ設置等）
- 最下階床面を露出させるための**ポンプ設置**
- 上記作業について、床面露出させる全ての建屋にて実施していく。



滞留水処理現場作業イメージ (2~4号機タービン建屋 (T/B) 想定)

1.2 今後の水位低下計画について

- 最下階中間部に高い空間線量が確認されたことから、作業被ばく抑制のため、作業に支障のない1階エリアから遠隔での床面露出用ポンプ設置等を進める。
- 段階的に建屋水位を低下させ、2018年度上期の1号機廃棄物処理建屋床面（T.P.-36）露出を目指す。
- 建屋への雨水・地下水流入抑制対策も進めつつ、2020年以降も継続して流入してくる雨水・地下水については、ポンプで排水し、床面の露出状態を維持する。また、循環注水を行っている1～3号機原子炉建屋については極力水位を低下させつつ、床面露出の実施可能性を検討していく。



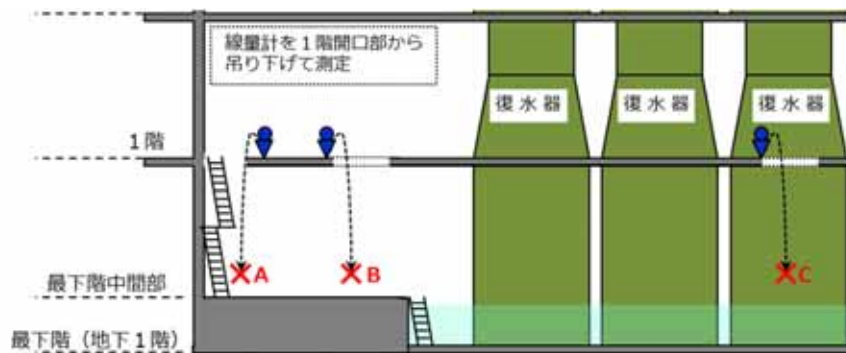
※1 循環注水を行っている1～3号機原子炉建屋以外の建屋の最下階床面露出。
 ※2 プロセス主建屋の水位を代表として表示。また、大雨時の一時貯留として運用しているため、降雨による一時的な変動あり。
 ※3 3号機T/B滞留水にも水位低下を進めて行く中で、浮上油を確認。

1.3 2～4号機T/B最下階中間部の線源調査について TEPCO

- 2～4号機T/B最下階中間部において、床面露出後の放射線環境の把握を目的とした最下階中間部の空間線量とスラッジ放射能濃度を調査した（2018年1～2月）※1。
 - 2号機は、1号機と比べて、空間線量が1桁以上高く、スラッジ放射能濃度は同程度。このため、主な線源は、スラッジではなく「機器・配管等」の可能性が高いと推定。
 - 3号機は、1号機と比べて、空間線量及びスラッジ放射能濃度が1桁以上高い。このため、主な線源は、「スラッジ」と「機器・配管等」の可能性が高いと推定。
 - 4号機は、空間線量及びスラッジ放射能濃度とも1号機と同程度である。
- 今回、2～4号機T/B最下階中間部の線量分布を取得することで上記の調査結果（空間線量の点情報から線源を推定した結果）を検証・確認する。

空間線量の測定結果〔単位：mSv/h〕※1,2

	2号機	3号機	4号機	1号機 ³
測定点A	120	83	—	2
測定点B	530	370	18	10
測定点C	1,000	80	—	—



T/B最下階中間部の空間線量測定点

【参考】今回用いた測定器：

イメージャー（ガンマカメラ）

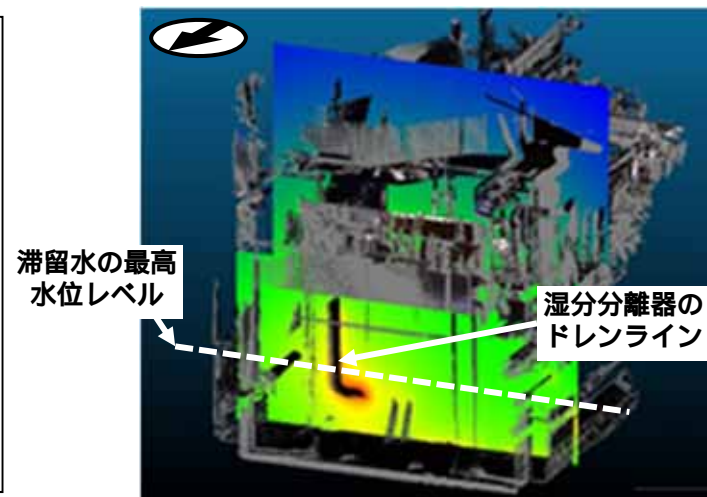
γ線の3次元線量分布
 （γ線測定結果と3Dスキャン情報の組み合わせ）

- 3Dスキャナ
- γ線センサ
- 光学カメラ

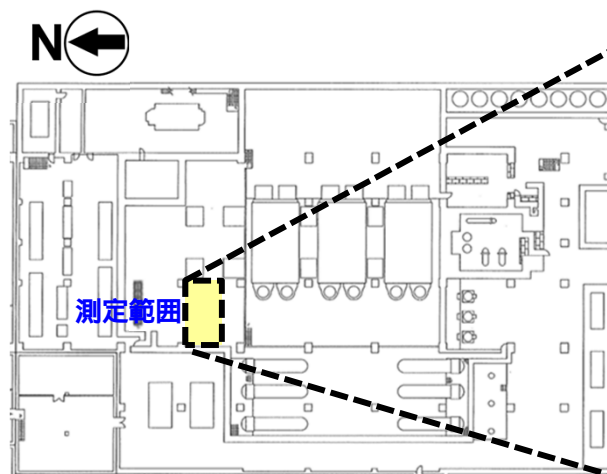
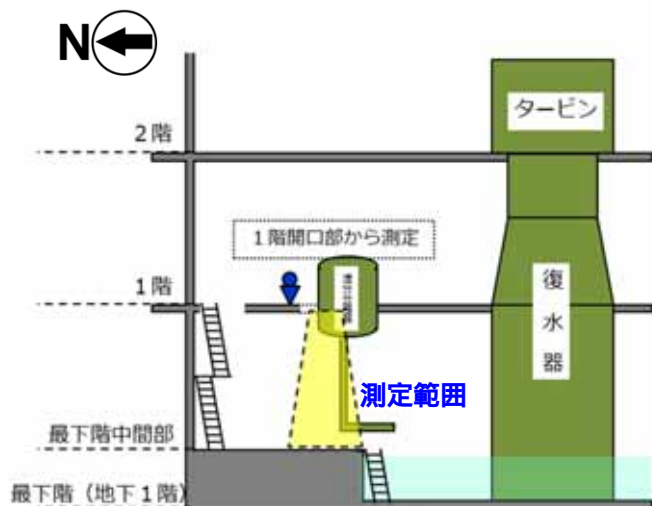
※1 第58回特定原子力施設監視・評価検討会（2018.2.14）報告
 ※2 各測定点の高さは、1階から約7m下（中間部床面から1m程度）
 ※3 スラッジ除去および遮へい設置等の環境改善前のデータ

1.3.1 線源調査結果 ～2号機～

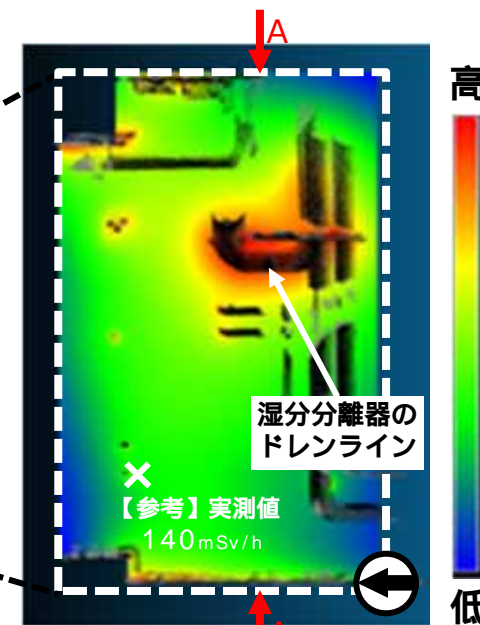
- 2号機T/B最下階中間部において、γ線の3次元線量分布を解析(右上：垂直分布、右下：平面分布 参照)。
- 主な線源が一部の「機器・配管等」であることを確認。
(スラッジからの線量寄与は比較的小さい)
- 今回の測定範囲においては、湿分分離器のドレンラインが最も高線量であり、その他配管においても線量が高いことを確認。



< 線量分布[垂直分布：下図のA A断面]>



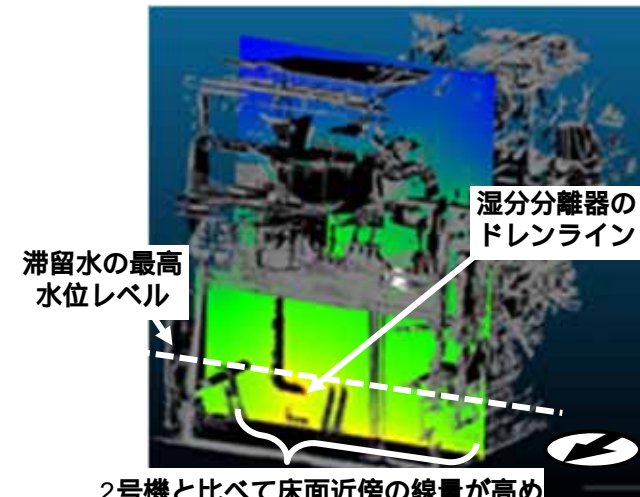
< 測定範囲 [] (左：測定イメージ、右：最下階平面レイアウト)>



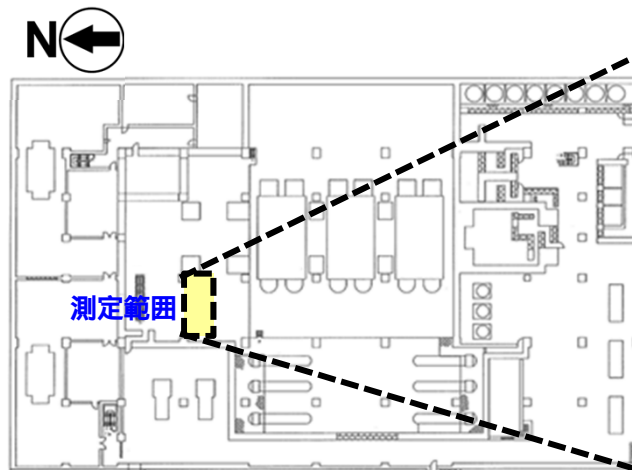
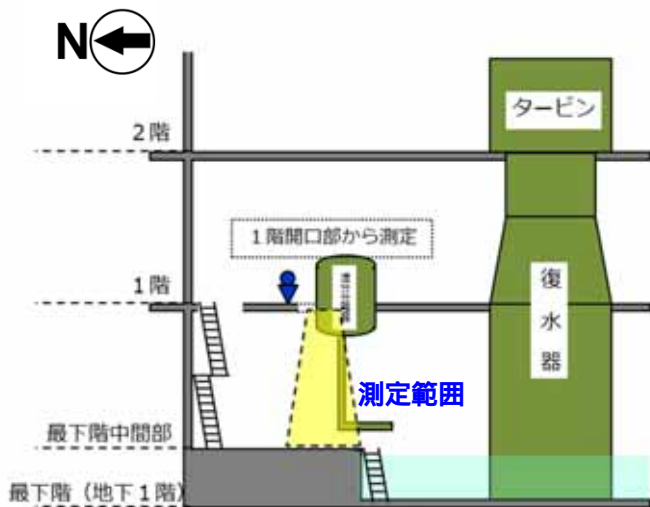
< 線量分布[床上1mの平面分布]>

1.3.2 線源調査結果 ～3号機～

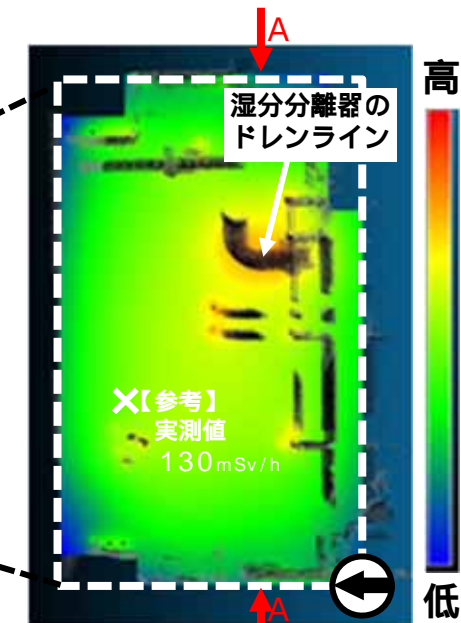
- 3号機 T/B 最下階中間部において、 γ 線の3次元線量分布を解析(右上：垂直分布、右下：平面分布 参照)。
- 主な線源が一部の「機器・配管等」であることを確認。
 なお、スラッジからの線量寄与は、2号機に比べて高い。
- 今回の測定範囲においては、湿分分離器のドレンラインが最も高線量であり、その他配管においても線量が高いことを確認。



2号機と比べて床面近傍の線量が高め
 <線量分布[垂直分布：下図のAA断面]>



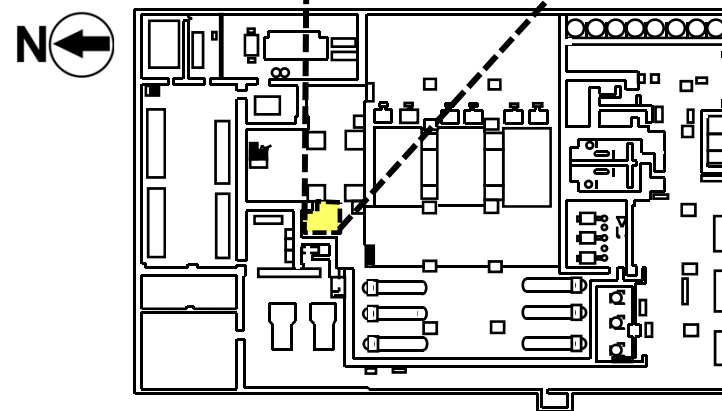
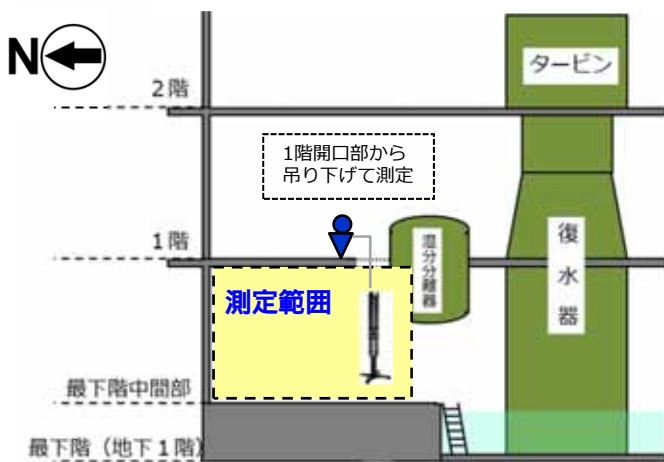
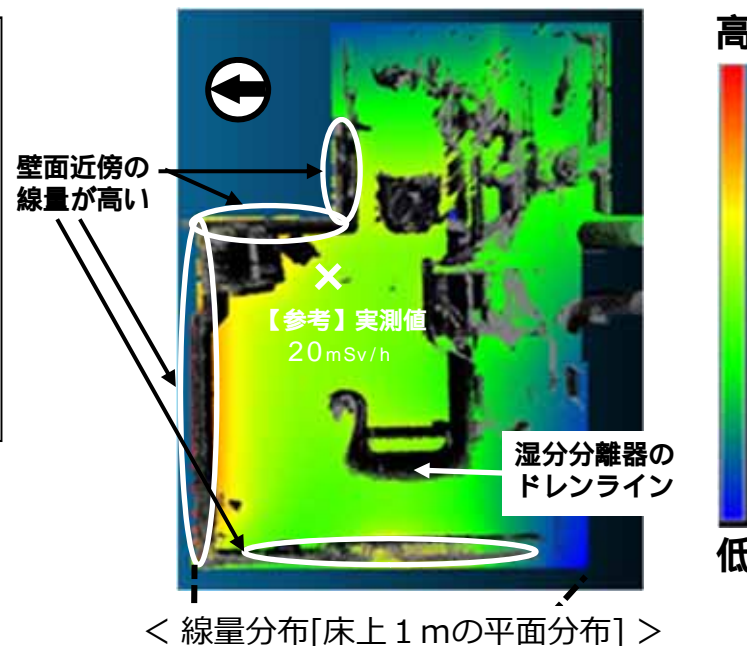
< 測定範囲 [測定イメージ、右：最下階平面レイアウト]>



<線量分布[床上1mの平面分布]>

1.3.3 線源調査結果 ～4号機～

- 4号機T/B最下階中間部において、 γ 線の3次元線量分布を解析（右：平面分布）。
- 主な線源が、滞留水に水没していた壁面等に付着している放射能であることを確認。
- なお、4号機の湿分分離器のドレンラインは、主な線源となっていない。



< 測定範囲 (左：測定イメージ、右：最下階平面レイアウト) >

1.3.4 2号機及び3号機T/B最下階中間部の線源について

- 2、3号機T/B最下階中間部の主な線源が、一部の「機器・配管等」であることを確認。
- 当該エリアには給復水系統、主蒸気のドレン系統等の配管が布設されており、これらの内包水、または滞留水を吸水した配管保温材等による影響と推測。

【系統内包水が線源となる可能性】

- 震災初期の高濃度滞留水を復水器内に貯留した実績があり、これらが復水器に接続している配管内に残存している可能性がある。なお、復水器内貯留水処理前の復水器内の線量は、最大で200 mSv/h程度であった。

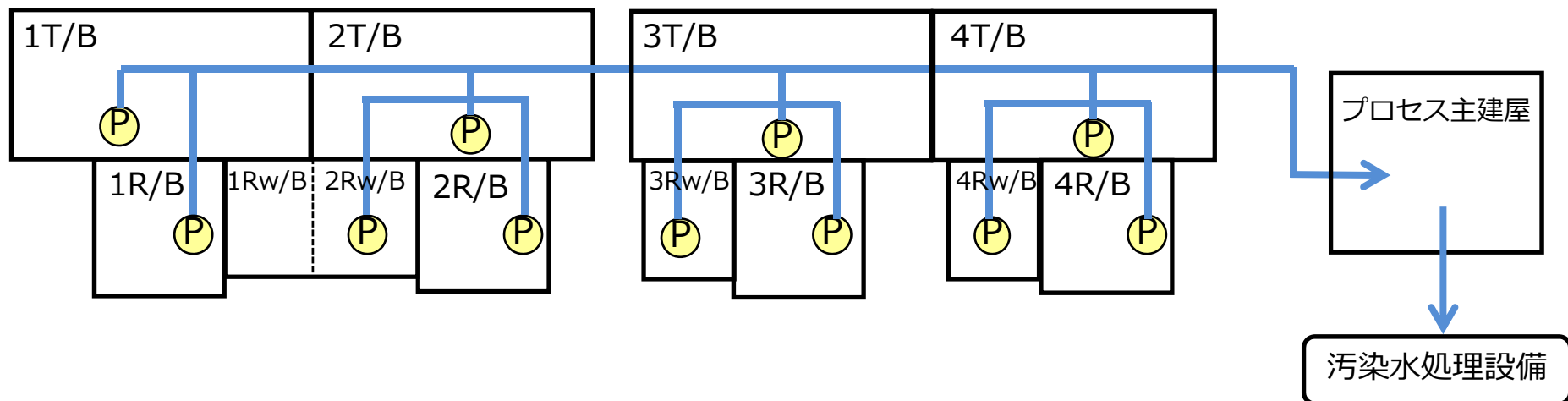
【配管保温材が線源となる可能性】

- 滞留水に水没していた際、配管保温材が滞留水を吸水するとともに放射能を取り込んだ後、滞留水の水位低下に伴う露出時に、水分が抜けて放射能が残存することで、線源となっている可能性がある。
- 今後、これら線量の状況を踏まえ、線量低減について検討していく。

2. 建屋滞留水中の放射性物質量の推移

2.1 プロセス主建屋における建屋滞留水中の放射能濃度の上昇傾向 **TEPCO**

- 1～4号機の建屋滞留水は主にプロセス主建屋へ移送し、その後、汚染水処理設備にて処理している。
- プロセス主建屋における建屋滞留水中の放射能濃度は、汚染水処理設備による循環浄化や地下水等の流入により、低下してきたものの、2016年末頃から上昇傾向を継続しており、建屋滞留水の放射性物質質量評価へも影響している。

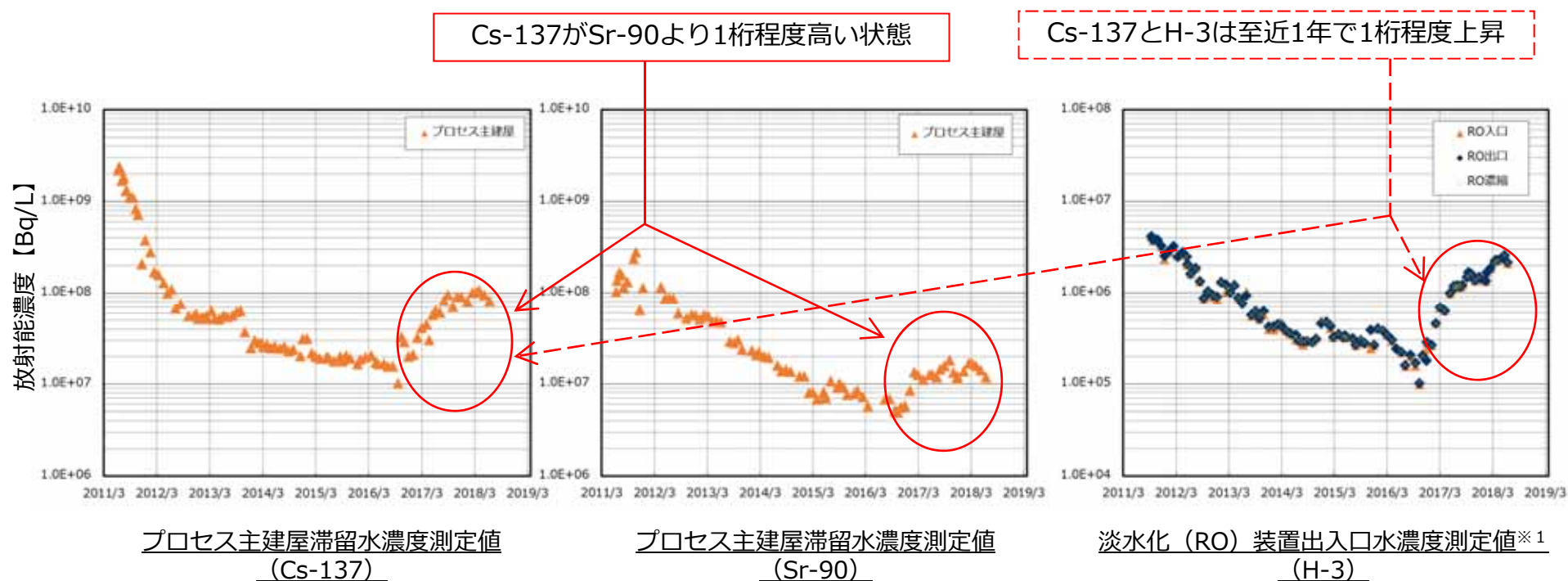


建屋滞留水移送ライン概要図

【注】 T/B：タービン建屋、R/B：原子炉建屋、Rw/B：廃棄物処理建屋

2.2 プロセス主建屋における建屋滞留水中の放射能濃度推移 TEPCO

- プロセス主建屋における滞留水中の放射能濃度の上昇傾向はCs-137の他、Sr-90、H-3※¹についても確認。上昇幅はCs-137、H-3については共に1桁程度であるのに対し、Sr-90については数倍程度であることを確認。
- 至近では、放射能濃度の上昇傾向は収まっていることを確認。



※¹ H-3については、淡水化 (RO) 装置出入口にて定期的に測定を実施。プロセス主建屋と同程度の値と想定。

2.3 1~4号機における建屋滞留水中の放射能濃度推移 TEPCO

- 以下に1~4号機における建屋滞留水中の放射能濃度推移を示す。
- 3号機R/Bがプロセス主建屋の濃度上昇の一因と考えられ、下記の調査を実施。（次頁参照）
 - 2018年5月に建屋水位を低下※1させた後の3号機R/B滞留水のサンプリングを実施
 - 局所的に放射能濃度の高いよどみ部の調査の一環として、深さ方向の濃度分布調査を実施
- 今後も3号機R/B以外の放射能濃度の確認を含めて、濃度上昇の検証を継続していく。

※1 SARRY2設置工事にて、プロセス主建屋の受入配管を改造することに伴い、一時的に受入が不可となることから、大雨時等のバッファとして、1~4号機側の水位を一時的に低下



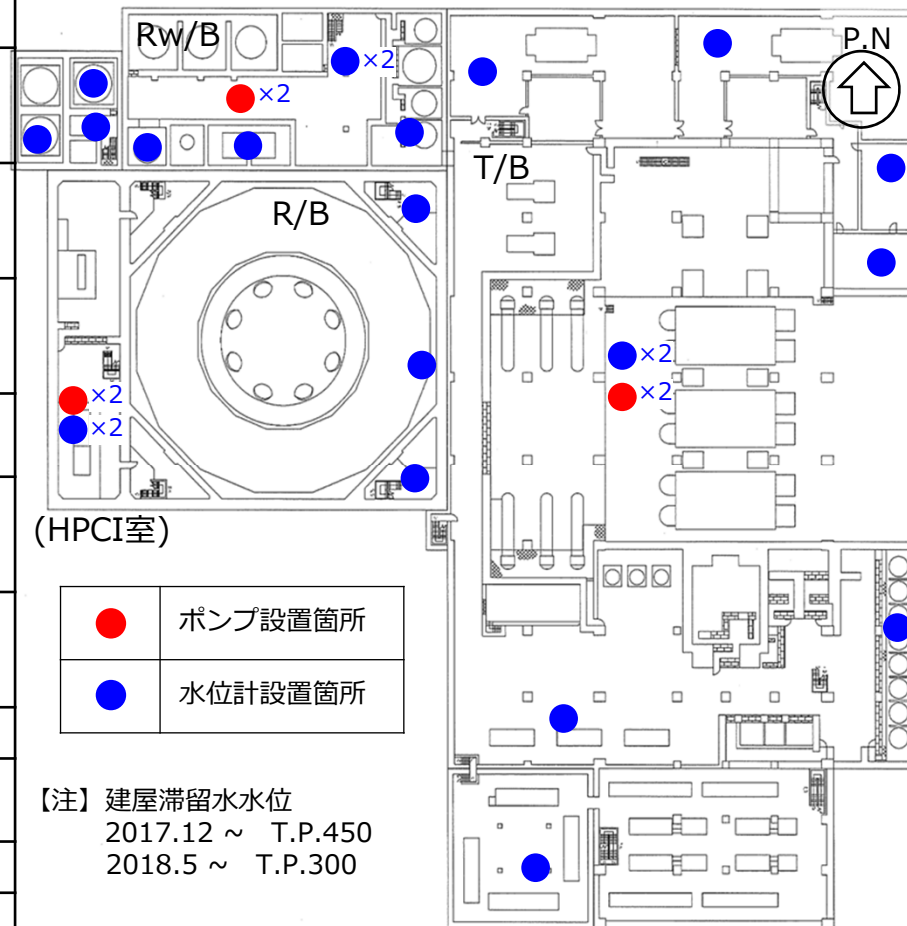
2.4 3号機における建屋滞留水放射能濃度について

- 3号機R/B滞留水のサンプリングを6/13に実施し、放射能濃度に有意な変動がないことを確認。引き続き、調査をしていく。
- 3号機R/Bの北西トラス室において、深さ方向の濃度分布を調べた結果、上部（水深約0.5m）と深部（水深約3m、ほぼ底面）における濃度差がほとんど無いことを確認。

至近の建屋滞留水サンプリング結果（赤字は至近の測定値）

			Cs-137濃度	採取日
①	R/B	トラス室 (南東側)	5.9E08 Bq/L	2017.12.13
			5.7E08 Bq/L	2018.2.6
			4.9E08 Bq/L	2018.6.13
		トラス室 (北西側)	5.9E08 Bq/L	2018.2.5
			4.8E08 Bq/L 5.1E08 Bq/L	2018.6.13 (上部) 2018.6.13 (深部)
③	南東コーナー	7.4E08 Bq/L	2017.12.13	
		6.0E08 Bq/L 4.8E08 Bq/L	2018.2.6 2018.6.13	
④	北西コーナー	5.9E08 Bq/L	2018.2.5	
		4.8E08 Bq/L	2018.6.13	
⑤	HPCI室	4.5E08 Bq/L	2017.4.20	
		5.9E08 Bq/L	2018.2.5	
		5.7E08 Bq/L	2018.6.15	
⑥	T/B	復水器エリア (滞留水移送ポンプ)	3.1E08 Bq/L	2017.11.21
			3.5E08 Bq/L 3.5E08 Bq/L	2018.2.6 2018.6.15
⑦		南側	2.3E07 Bq/L	2017.10.17
⑧	Rw/B	(滞留水移送ポンプ)	7.5E07 Bq/L	2017.10.27
			7.1E07 Bq/L	2018.6.18
⑨	(参考)	PCV内水 (上澄水)	1.6E06 Bq/L	2015.10.29
⑩	(参考)	MSIV室水漏れ水※1	8.7E05 Bq/L	2018.2.6

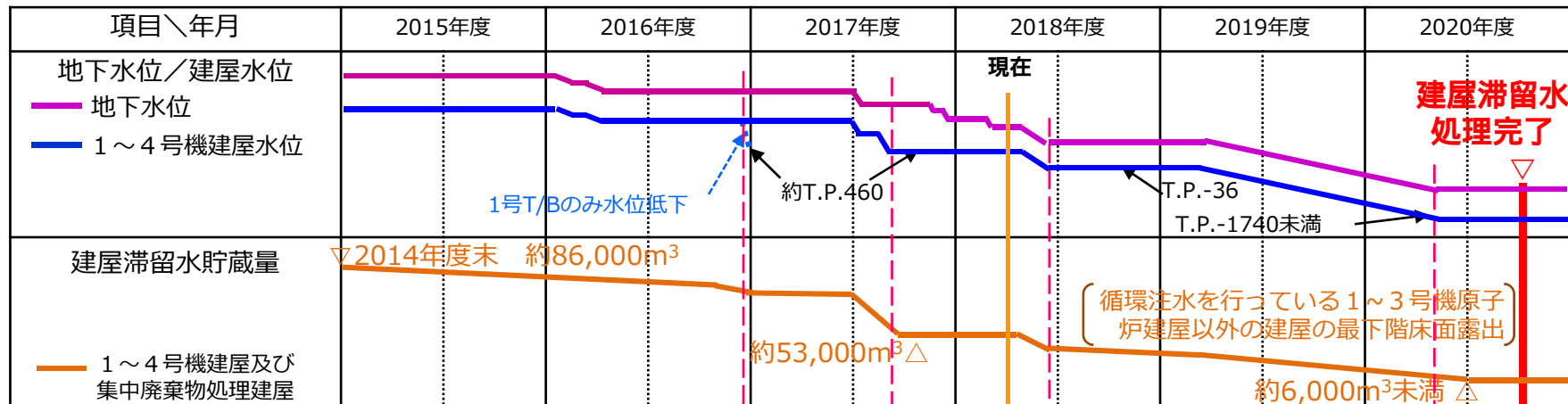
※1 主蒸気配管の伸縮継手より漏れたPCV内の上澄水



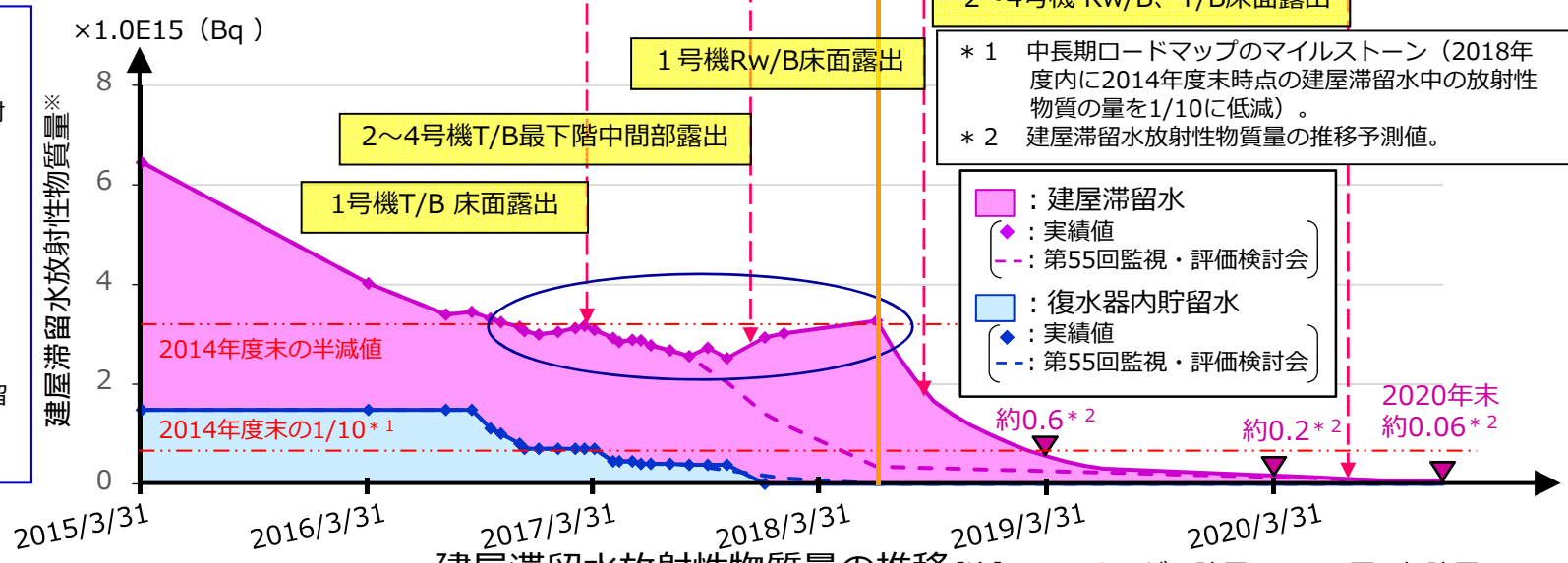
3号機平面図

2.5 建屋滞留水中の放射性物質量の推移

- 建屋滞留水の放射能濃度上昇が確認されたエリアはあるものの、建屋滞留水処理（貯蔵量低減）は計画通り進めていく。
- 高い放射能濃度が確認された3号機R/Bの滞留水については、処理を実施中。
- 2018年2月下旬より、建屋滞留水中の放射性物質量を低減させるための浄化処理を実施中。



※ 建屋滞留水の放射性物質量は、代表核種（Cs134、Cs137、Sr90）の放射能濃度測定値と貯蔵量から算出。このため局所的に放射能濃度の高い滞留水等の影響にて建屋滞留水の放射能濃度が変動することにより、評価上、放射性物質量が増減することがある。
 なお、高い放射能濃度が確認された3号機R/B滞留水については、濃度分布等を確認後、反映予定。



- * 1 中長期ロードマップのマイルストーン（2018年度内に2014年度末時点の建屋滞留水中の放射性物質の量を1/10に低減）。
- * 2 建屋滞留水放射性物質量の推移予測値。

建屋滞留水放射性物質量の推移【注】 T/B：タービン建屋、R/B：原子炉建屋、Rw/B：廃棄物処理建屋

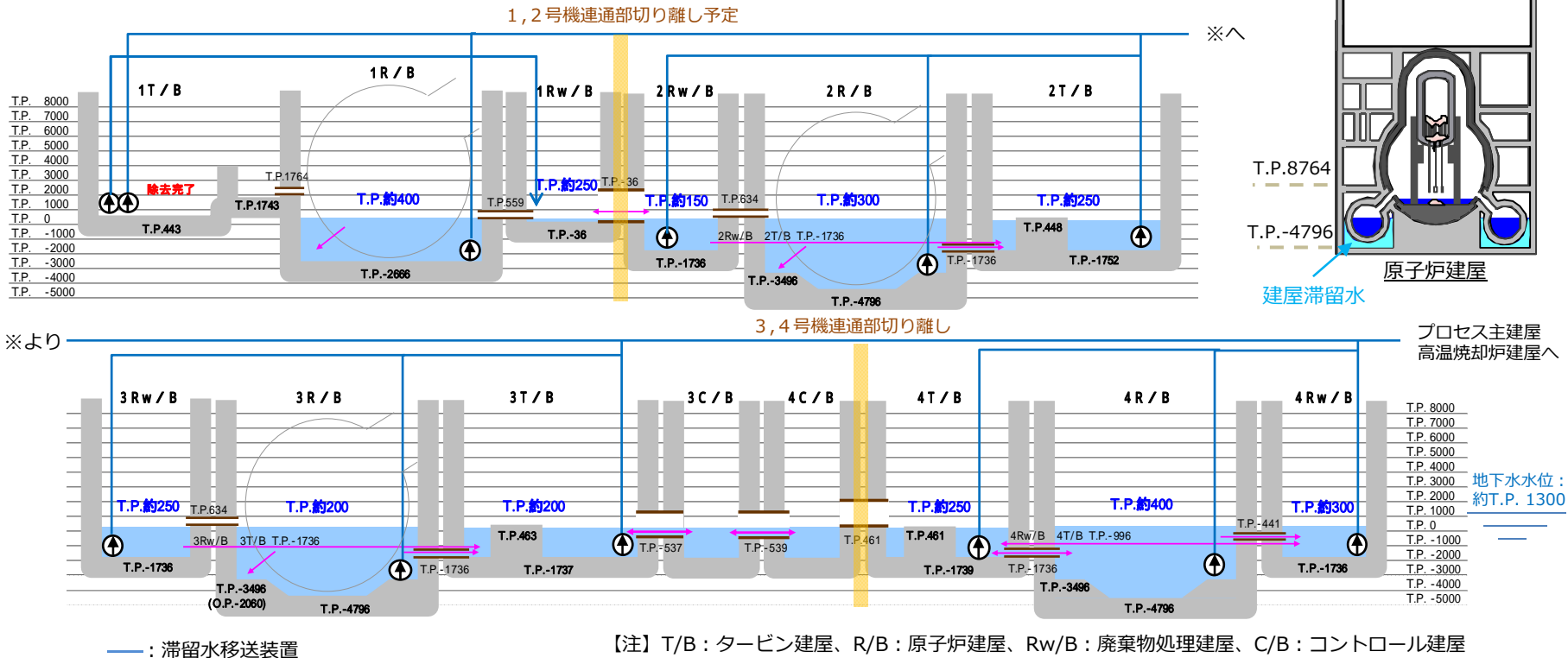
以下、参考資料

【参考】建屋滞留水処理の進め方

■ 建屋滞留水処理の進め方

- 1号機タービン建屋 (T/B) 【T.P.443】 : 2016年度末
- ⇒2~4号機T/B地下階中間部 【T.P.460】 : 2017年12月 (3,4号機間切り離し)
- ⇒1号機廃棄物処理建屋 (Rw/B) 【T.P.-36】 : 2018年9月 (1,2号機間切り離し) ※1
- ⇒2~4号機T/B、Rw/B 【約T.P.-1740】
- 4号機原子炉建屋 (R/B) 【T.P.-4796】 : 2020年内 (建屋滞留水処理完了)

<1~4号機の建屋床面レベル、建屋間貫通部及び滞留水の水位 (2018.6.28現在) >



※1 1号機Rw/Bは地下階の連絡通路で2号機Rw/Bに繋がっていることを確認しており、2号機Rw/Bに設置した滞留水移送ポンプで建屋滞留水水位を下げることによって、1号機Rw/Bの床面を露出させる計画。